

「先の者があとになり、あとの者が先になる」

## ■はじめに

1. 2019年7月14日の熊本集会の中で、復活にも順番があることをお話しました。新約時代の信者たちは教会の携挙のとき、旧約時代の信者たちは大患難期のあとの75日間のときに復活します。このことに関連して質問がありました。

質問：ところで、福音書の中には、「先の者があとになり、あとの者が先になる」と言われている箇所があります。これは、復活の順序を指しているのでしょうか？先の者とは旧約時代の信者たち、あとの者とは新約時代の信者たちを指し、復活の順序が逆転する、という理解でよいのでしょうか？

2. 該当の箇所は、マタイの福音書 19:30、20:16、ルカの福音書 13:30 の3か所です。結論としては、それらの箇所は、どれも復活の順序に関して教えるものではありません。「先の者があとになり、あとの者が先になる」という表現は、順番が逆転するという意味ですが、どういう順番が逆転するのかは、それぞれの箇所の文脈によります。
  - (1) ルカの福音書 13:30 では、民族としてのユダヤ人の救いと異邦人の救いについて、順序が逆転します。
  - (2) マタイの福音書 19:30 では、永遠のいのちを得ることについて、裕福で地位もある人とそうでない弟子たちのような人の順序が逆転します。
  - (3) マタイの福音書 20:16 では、信者がイエスに従うために失ったものを神が回復してくださることについて、人の目から見た犠牲の大小による順序が逆転することがあります。また、信者の働きに対する報奨について、信者たちの間での先輩・後輩などの順序が逆転することがあります。
3. 当日はマタイ 20:16 の箇所を引きました。集会リーダーの清水は、どういう順番が逆転するのかをルカ 13:30 で言われていることと混同して、お答えしてしまいました。お詫びして訂正するとともに、あらためて、3か所それぞれの文脈を確認し、どういう順番が逆転するのか、説明いたします。
4. この説明の内容は、フルクテンバウム博士の「The Life of Messiah」第3巻によりますが、清水において補足説明を加えております。
5. アウトラインは次のとおりです。（§番号は、「The Life of Messiah」の付番）
  - (1) ルカの福音書 13:22~30 メシアの王国に入ることについて（§114）
  - (2) マタイの福音書 19:16~30 永遠のいのちを受けることについて（§127）
  - (3) マタイの福音書 20:1~20:16 信者が受ける報償と報奨について（§127）

□ルカの福音書 13 : 22~30 メシアの王国に入ることについて (§ 114)

1. この場面は、13 : 22「イエスは、町々村々を次々に教えながら通り、エルサレムへの旅を続けられた」。イエスの公生涯は約3年半、それも終わりに近づいている時期のこと、この旅はエルサレムへの最後の旅です。エルサレムに着くと最後の1週間を過ごし、イエスは十字架にかかりました。
2. 23節 この旅の途中で、ある人がイエスに質問しました。「主よ。救われる者は少ないのですか」。この質問は、町々村々を教えながら通ってきたときの民衆の反応を見ての質問です。ユダヤ人の指導者たちがイエスをメシアではないと判定したので、民衆の多くがそれに従い、イエスを敬遠するようになっていたのです。
3. 24~27節 この質問に対し、イエスは、次のように答えました。「努力して狭い門から入りなさい。なぜなら、あなたがたに言いますが、入ろうとしても、入れなくなる人が多いのですから。家の主人が、立ち上がって、戸をしめてしまってからでは、外に立って、『ご主人さま。あけてください』と言って、戸をいくらたたいても、もう主人は、『あなたがたがどこの者か、私は知らない』と答えるでしょう。すると、あなたがたは、こう言い始めるでしょう。『私たちは、ごいっしょに、食べたり飲んだりいたしましたし、私たちの大通りで教えていただきました。』だが、主人はこう言うでしょう。『私はあなたがたがどこの者だか知りません。不正を行う者たち。みな出て行きなさい。』

(1) 努力して狭い門から入りなさい

- ① イエスを拒絶した指導者たち、特にパリサイ人（びと）と呼ばれるユダヤ教パリサイ派の教師たちは、「言い伝え」と呼ばれる詳細な規則を定めて民衆にそれを負わせる一方で、救いについては、ユダヤ人であれば全員が永遠のいのちを受けて、神の国に入ることができると教えていました。これは、広い門です。
- ② それに対して、イエスは、血筋で救いを受けることはできない、完全な神の義を持つ人だけが神の国に入ることができると教えました。その完全な神の義とは、人が自分で獲得するものではなく、信仰によって認められる義です。イエスは、これを「狭い門」と表現しました。
- ③ この時点で人々が持つべき信仰の内容は、イエスの十字架はまだですから、十字架の福音ではありません。イエスが当時、宣べ伝えたのは、旧約聖書に預言されていたとおりにイエスがメシアとして来たこと、イエスのしているわざを見るならば、イエスがメシアであることは明白であること、したがってイエスをメシアとして受け入れること、これが当時のユダヤ人たちが救いを受けるために必要な信仰の内容でした。もし、彼らがそれを受け入れるなら、ユダヤ人の民族的救いは成就し、神の国が地上に到来したはずです。それゆえ、イエスが当時、宣べ伝えた福音は、神の国の福音と呼ばれました。
- ④ しかし、狭い門から入ろうとすると、つまり、イエスを信じて、イエスのもとに来ようとする、その人には当時のユダヤ人社会から相当の圧力がかかり

ます。仕事を失うことすらありました。これに耐えてイエスのもとに来るのが、「努力して」ということです。

- (2) イエスの答えの中に登場する「家の主人」とは、イエス自身のことです。「いっしょに食べたり飲んだり、大通りで教えていただいた」人々とは、当時のユダヤ人たちです。
4. 28～29 節 イエスの答えは次のように続きます。「神の国にアブラハムやイサクやヤコブや、すべての預言者たちが入っているのに、あなたがたは外に投げ出されることになったとき、そこで泣き叫んだり、歯ぎしりしたりするのです。人々は、東からも西からも、また南からも北からも来て、神の国で食卓に着きます。」
  - (1) 神の国とは、メシアが王となってこの地上に立てる王国です。ユダヤ人の先祖であるアブラハム、その子イサク、孫のヤコブが、復活して王国に入ります。「すべての預言者たち」、彼らは皆ユダヤ人です。旧約聖書に記録された信仰者たちであり、神のことばを時の指導者たちや民衆に伝えました。彼らの多くは苦難を受け、殺された者たちもいました。彼らも全員、復活して王国に入ります。
  - (2) それなのに、「あなたがた」、イエスの公生涯を目撃した当時のユダヤ人たちの多くが、イエスを拒否して神の国には入ることができなくなる、という警告です。
  - (3) 「人々は、東からも西からも、また南からも北からも来て、神の国で食卓に着きます」。この人々は、ユダヤ人ではありません。聖書ではユダヤ人以外の人々を、諸国民、あるいは異邦人といいます。全世界の異邦人の中から、救いを受けて神の国に入る人たちが大勢出ると、イエスは預言したのです。
5. 30 節 イエスはこの答えを次のことばで締めくくります。「いいですか、今しんがりの者があとで先頭になり、いま先頭の者がしんがりになるのです。」
  - (1) 「今しんがりの者」とは、異邦人です。当時のユダヤ人たちの考えでは、異邦人は神の国に入ることはできません。異邦人はモーセの律法をもたないからです。異邦人が永遠のいのちを受けて神の国に入るためには、ユダヤ教に改宗し、モーセの律法の枠内に入るしかない、と考えられていました。
  - (2) 「いま先頭の者」とは、当時のユダヤ人です。
  - (3) 異邦人とユダヤ人とで順番が逆転する、ということになります。
6. まとめ
  - (1) ここでの質問「救われる者は少ないのですか」は、個人的な救いについてではなく、当時のユダヤ人の民族的救いについてです。
    - ① 現代における個人的な救いについて適用することはできません。現代の信者のだれひとり、イエスといっしょに食べたり飲んだり、大通りで教えていただいた人はいません。
    - ② ですから、この箇所を引用して、「信者であっても努力しないなら、イエスから『あなたがどこの者か知らない』と言われてしまうことになります」などと、

信者に無用の恐れを与えることは、間違っています。

- (2) ユダヤ教パリサイ派の教師たちは、ユダヤ人であればその血筋により全員が救われると教えたのに対し、イエスは信仰によって神の義を受け取った者のみが救われると教えました。
- (3) 当時イエスを目の前にして神の国の福音を聴いているユダヤ人たちは、その多くがイエスをメシアではないと否定して神の国に入れなくなります。そして、当時は神の国から遠ざけられていた異邦人が大勢、神の国に入るときが来ます。ユダヤ人と異邦人とで、順番が逆転するというのです。
- (4) このことは、ユダヤ人がもはや民族的な救いを失ったということではありません。
  - ① ローマ人への手紙 11 章は次のように教えています。「兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの奥義を知っていただきたい。それは、あなたがたが自分で自分を賢いと思うことがないようにするためです。その奥義とは、イスラエル人の一部がかたくなになっただけなのは異邦人の完成のなる時までであり、こうして、イスラエルはみな救われる、ということです」(11:25~26)。
  - ② 「異邦人の完成のなる時」とは、教会の信者となるべき異邦人の数が満ちる時です。神の計画の中で、救いを受けて教会に属する異邦人の数に定数があります。その数が満ちると、教会の信者たちは天に携挙されます。
  - ③ 地上から教会の信者がいなくなったあと、地上には 7 年間の大患難期が来ます。それまでユダヤ人たちはイエスを拒否し続けますが、大患難期の末期、生き残ったイスラエル民族、すなわちユダヤ人たちは、ついに、イエスをメシアとして認め、全員がみな救われます。これがイスラエルの民族的救いです。

□マタイの福音書 19:16~30 永遠のいのちを受けることについて (§ 127)

1. この出来事は、マルコの福音書とルカの福音書にも記録があります（マルコ 10:17~31、ルカ 18:18~30）。マタイ 19:16 には「ひとりの人が」とだけ紹介されていますが、19:20 では「青年」、19:22 では「この人は多くの財産を持っていた」、ルカ 18:18 では「ある役人」、18:23 「たいへんな金持ち」とあります。
2. 16 節 お金も地位もあるこの青年は、イエスのところに来て、「永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。」と尋ねました。
3. 17 節 この質問に対し、イエスは別の質問で返しました。「なぜ、良いことについて、わたしに尋ねるのですか。良い方は、ひとりだけです。」
  - (1) このイエスの問いかけは、当時のユダヤ教のラビ（教師）の典型的な指導法です。質問を受けたら、別の質問を返して弟子に考えさせ、真理に導く、という指導法です。これは、自分の行いではなく、メシアに目を向けさせるための質問です。
  - (2) このイエスの問いかけに対して、青年は、「あなたは、その良い方＝神です」と答えるべきだったのです。イエスをメシアとして認め、イエスを神の子であると認めるなら、その信仰によって彼は永遠のいのちを得たはずですが。
  - (3) しかし、青年は黙って答えませんでした。
4. 17~18 節 そこでイエスは、次の指導に移ります。「もし、いのちに入りたいと思うなら、戒めを守りなさい」と言いました。青年は「どの戒めですか」と尋ねました。
  - (1) モーセの律法には 613 の規定があるとされています。有名な十戒は、その一部です。
  - (2) 当時のユダヤ教の教師たちの間では、律法の規定の中では重要度に違いはあるのか、あるとすればどの規定が一番たいせつなのか、といった議論がありました。
  - (3) 青年は日頃からユダヤ教の教師たちの話に耳を傾けていたのでしょうか。どの戒めを守ったら、永遠のいのちに入れるのかと尋ねました。
5. 18~19 節 イエスは、答えます。「殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証をしてはならない。父と母を敬え。あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」
  - (1) イエスの答えは、十戒（出エジプト記 20:1~17、申命記 5:4~21）からその後半の部分、そしてレビ記 19:18「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」を引用したものです。
  - (2) イエスの答えは、いずれも人との関係に関する規定です。十戒の前半は神との関係、後半は人との関係です。その中から、後半を引用しました。レビ記 19:18 も、人との関係です。
6. 20 節 青年は答えました。「そのようなことはみな、守っております。何がまだ欠けているのでしょうか。」
  - (1) 青年は、人との関係ではモーセの律法に照らして落ち度はないと思っていました。

- (2) ルカ 18 : 18 では、「そのようなことはみな、小さい時から守っております」とあります。おそらく彼の父親が貧しい人への施しなどもきちんとしていたのでしょう。それを見て育ってきたので、彼自身も子どもの頃から人との関係に気を配ってきました。
- (3) しかし、彼の心の中には、何か欠けているという思いがありました。何が欠けているか、そのことをイエスは、次のことばで明らかにします。
7. 21 節 イエスは彼に言いました。「もし、あなたが完全になりたいなら、帰って、あなたの持ち物を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むこととなります。そのうえで、わたしについて来なさい。」
- (1) 青年に欠けていたのは、天、すなわち神との関係です。青年は、イエスから十戒の後半部分を言われたとき、「そのようなことはみな、守っております」と答えながら、まだ何か欠けていると感じていました。イエスは、十戒の前半部分、神との関係が青年に欠けていることを教えていたのです。
- (2) 裕福な人は、神に頼るのではなく、自分の富に頼る傾向があります。また、富をもっていることを、自分は神から祝福されているしるしなのだと受け取る傾向があります。
- (3) イエスは、彼に 3 つのことを勧めました。
- ① 持ち物をすべて売り払って、富を整理しなさい・・・これは、神を愛することを示すためです。富が彼を神に信頼させないようにしていたからです。
  - ② 貧しい人たちに与えなさい・・・これは、隣人への愛を示すためです。
  - ③ わたしについて来なさい・・・これは、イエスをメシアとして受け入れたことを示すためです。
8. 22 節 ところが、青年はこのことばを聞くと、悲しんで去って行きました。この人は多くの財産を持っていたからです。
- (1) 青年は、イエスの勧めを聞いて、悲しんで去って行きました。イエスのことばは、この青年にとっては、聞きたくないことばだったのです。
- (2) 福音書は、その理由を「この人は多くの財産を持っていたからである」と記しています。彼は、神に信頼することをしませんでした。イエスが見抜いたとおり、富が彼を信仰から遠ざけていました。
9. 23 節 青年が去ったあと、イエスはそばにいた弟子たちの指導に移ります。イエスは弟子たちに言われました。「まことに、あなたがたに告げます。金持ちが天の御国に入るのはむずかしいことです。」
- (1) 「天の御国 (てんのみくに)」とは、神の国です。メシアが王となって地上に立てる国です。信者は、永遠のいのちをもって、その国に入ります。
- (2) 青年が求めた「永遠のいのちを得る」も、神の国に入ることを指していました。
10. 24~25 節 イエスは、さらに続けて、金持ちが神の国に入るのは、どれほどむずかし

いかを教えます。「まことに、あなたがたにもう一度、告げます。金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」これには、弟子たちがたいへん驚いて言いました。「それでは、だれが救われることができるのでしょうか。」

- (1) 体の大きにならうだが、縫物をする針の穴、あるいは外科手術で使う針の穴、あの糸を通すだけの小さな穴を通るはずがありません。しかし、それよりも、金持ちが神の国に入る方がもっとむずかしいというのです。
- (2) 弟子たちにとって、これは常識を覆されることばでした。当時のユダヤ人の理解では、裕福で社会的地位もある人は神の国に当然入れる人でした。裕福であるということ自体が、神からの祝福を受けていると見られたからです。
- (3) あの青年は、弟子たちの目からは、神の国に最も近い人です。それに対して、弟子たちの多くはガリラヤ湖の漁師でした。富もない、地位もない、教育もないのです。弟子たちは、あの青年が救われないなら、いったい誰が救われて、永遠のいのちを得て神の国に入ることができるのかと、驚き、疑問に思ったのです。

11. 26節 驚く弟子たちをイエスはじっと見て言われました。「それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます」

- (1) 救われること、すなわち、永遠のいのちを得て神の国に入ることは、金持ちに限らず、人にはできないことです。人は自分の行いでは、永遠のいのちを得ることのできるレベルにまで、到達することはできません。
- (2) しかし、神にはどんなことでもできます。救いは神のみわざです。

12. 27節 ここで、弟子のひとりであるペテロがイエスに言いました。「ご覧ください。私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。私たちは何がいただけるでしょうか。」

- (1) 十二弟子たち（使徒たち）のうち少なくとも7人ほどは、ガリラヤ湖の漁師であったと推定されます（ヨハネ 21:2~3）。彼らは、あの青年のような金持ちではありませんが、船や網など自分のものを捨ててイエスに従ってきました。
- (2) ペテロは、思ったらずぐに口にする性格だったようです。あの青年はイエスのことばを聞いて悲しんで去って行ったが、自分たちは何もかも捨てて、イエスに従ってきた、自分たちには何が与えられるのか、と心の中に思いが起きて、それをイエスに尋ねたのです。

13. 28~29節 ペテロの質問を受けて、イエスは3つの約束を弟子たちに与えます。

- (1) 1番目の約束・・・12人の弟子たち（使徒たち）は、メシアの王国において、それぞれがイスラエルの一つの部族を統治し、計12の部族を統治する。
- (2) 2番目の約束・・・イエスの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、あるいは畑を捨てた者はすべて、その幾倍も受ける。
  - ① マルコ 10:30 には、「その100倍を受ける。今のこの時代には、家、兄弟、姉妹、母、子、畑を迫害の中で受ける」とあります。

- ② 「100倍を受ける」とは、豊かに実を結ぶことの表現です（マタイ 13：23）
- ③ 「畑」は、生活の糧、仕事一般も意味します。
- ④ 家族や生活の糧を豊かに受けとることは、とくに教会との関係で成就します。
- マタイ 12：48～50 では、イエスは次のように言いました。「わたしの母とはだれですか。また、わたしの兄弟とはだれですか。」それから、イエスは手を弟子たちのほうに差し伸べて言われた。「見なさい。わたしの母、わたしの兄弟たちです。天におられるわたしの父のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです。」
  - イエスをメシアとして受け入れるなら、ユダヤ人信者は、家を追い出されます。その人は、母や兄弟などを失うことになるわけですが、教会に属することで、100倍の母や兄弟などに相当する、信者の交わりが与えられます。
  - 「畑」は生活の糧、仕事一般も意味します。ユダヤ人信者は、ユダヤ人社会からも追放され、仕事を失います。教会は、迫害で経済的困窮に直面した信者たちを助ける役割を果たします。
  - 使徒 2：41～47 は、信者の交わりと経済的共助の実例です。
- ⑤ 「今のこの時代」、「迫害の中で」ですから、これはメシアの王国で成就する約束ではなく、メシアの王国が到来する前の今の時代を生きる信者たちに対する約束です。
- (3) 3番目の約束・・・永遠のいのちを受け継ぐ。
- ① マルコ 10：30 には、「後の世では永遠のいのちを受けます」とあります。「後の世」とはメシアの王国です。
- ② あの青年がイエスのところに来て最初にした質問は、「永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか」でした。弟子たちの目には、あの裕福で地位もある青年は、ユダヤ人の中で、誰よりも神の国に近い人に見えました。しかし、イエスは、ここで、永遠のいのちを与えるという約束を、裕福で地位のある人ではなく、貧しくともイエスをメシアとして信じてついできた弟子たちに約束したのです。
14. 30 節 これら 3つの約束を語ったあと、イエスは、言いました。「先の者があとになり、あとの者が先になることが多いのです。」
- (1) 先の者とは、裕福で地位のある人です。あとの者とは、弟子たちのような貧しい人たちです。永遠のいのちを受け、神の国に入ることにおいては、当時のユダヤ人たちの常識がくつがえり、順番が逆転するという、教えです。
- (2) 裕福で地位のある人が救われない、ということではありません。神には金持ちを救うこともできます。
- ① アリマタヤという町の金持ちでヨセフという人がいました（マタイ 27：57）。

彼は有力な議員でした（マルコ 15 : 43）。彼はイエスをメシアであると信じていましたが、迫害を恐れてそれを隠していました（ヨハネ 19 : 38）。

- ② しかし、イエスの十字架刑のときに、ついに思い切って（マルコ 15 : 43）、イエスの遺体の下げ渡しを願い出て、イエスの遺体を自分のために用意していた新しい墓に葬りました。この行為を通して、彼は信仰を外側に示しました。
- ③ 彼は金持ちでしたが、たしかに信者だったのです。

15. 3つの約束のうち、1番目と2番目は、永遠のいのちを得ることではありません。1番目は、12人の弟子たちがメシアの王国でイスラエル12部族を治めることです。2番目は、信者がイエスに従うために失ったものを神が回復してくださることについてです。そして、「先の者があとになり、あとの者が先になることが多いのです」という順序の逆転は、この2つの約束についても起こると、イエスは教えたのです。

- (1) たとえば、2番目について考えてみると、人の目からは、信者がどれだけ犠牲を払ったか、その大小によって、神による回復も比例して当然だ、と思われれます。そして、自分で払ったと思っている犠牲と他の信者が払っているように見える犠牲とを比較して、自分の方が大きいと思えば、当然、神から受ける回復も大きいはずであると期待します。
- (2) ところがそうはならない。となると、「神様は、不公平ではないか」と不満を持つことがあります。
- (3) これについて、イエスは、次に「ぶどう園の主人のたとえ」をもって、教えてくださいました。

□マタイの福音書 20：1～20：16 信者が受ける報償と報奨について (§ 127)

1. 20：1 から語られる「ぶどう園の主人」のたとえ話は、19：27～30 の延長にあります。
  - (1) 弟子のひとりのペテロが、「私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。私たちは何がいただけるのでしょうか。」と尋ねたことに答えて、イエスが 3 つの約束を言いました。
    - ① 1 番目の約束は、12 人の使徒たちに対する約束です。彼らは、メシアの王国において、12 部族を治めるという重要な地位に着きます。
    - ② 2 番目の約束は、信者全般に対する約束です。信者がイエスに従うために失ったものを神が回復してくださることについてです。
    - ③ 3 番目の約束も、信者全般に対する約束です。永遠のいのちを受けて、メシアの王国に入るといふ約束です。
  - (2) 1 番目の約束の中では、12 人の弟子たちの誰がどの部族を治めるのか、については、明らかにされていません。
    - ① おそらく、この約束を聞いた弟子たちの心の中では、自分はどの部族を治めることになるのか、気になったことでしょう。12 部族のうち、長子の権利をもつのはエフライム族、王権を持つのはユダ族、さらに 12 人の族長たちの出生順による序列（創 43：33）などがありますから、どの部族を担当するのか、それは、そのまま、弟子たちの序列が明らかになるように思えたからです。
    - ② 弟子たちの間では、最初、イエスの弟子になった順番や年齢で序列がおのずとあったようです。
    - ③ しかし、イエスによって弟子集団の中から 12 人の使徒が選抜されました（マタイ 10 章、マルコ 3 章、ルカ 6 章）。
    - ④ その 12 人の中で、最初にイエスを神の子であると告白したのは、ペテロでした。しかし、彼は、信仰告白のあと、すぐに叱られることもありました（マタイ 16 章）。そして、変貌山には、12 人の中から、ペテロ、ヤコブ、ヨハネの 3 人が伴われました（マタイ 17 章、マルコ 9 章、ルカ 9 章）。
    - ⑤ このように、弟子たちの中で、自分たちの序列は、単に弟子になった順番とか、年齢順ではないだろうという理解になったものと推定されます。
    - ⑥ そうなると、では誰が一番なのか、という議論が起きました（マルコ 9：34、ルカ 9：46）。
  - (3) 2 番目の約束は、信者が払った犠牲に対して神が回復してくださるというものです。
    - ① 人の目から見ると、犠牲の大小によって、神による回復も比例して当然と思われれます。そして、自分で払ったと思っている犠牲と他の信者が払っている犠牲とを比較して、自分の方が大きいと思うと、当然、神から受ける回復も大きいはずであると期待します。
    - ② ところがそうはならない。となると、「神様は、不公平ではないか」、そのよう

な不満を持つことがあります。

2. このような弟子たちの内心のもやもやとしたものについて、ここで、イエスが「ぶどう園の主人」のたとえ話を語って教えます。

(1) たとえ話を理解するときには大切なのは、たとえ話の結論部分を押さえることです。結論から離れると、たとえ話はいかようにも解釈できてしまいます。

(2) 結論部分は、20：14～15です。

- ① 14節 自分の分を取って帰りなさい。
- ② 15節 自分のものを自分の思うようにしてはいけないという法がありますか。
- ③ 15節 私が気前がいい（良い）ので、あなたの目にはねたましく（悪く）思われるのですか。

(3) このたとえ話では、ぶどう園の主人は、神です。労働者たちは、信者です。13節では「友よ」と呼びかけられていますので、不平を言った者も信者です。

① 労働者たちがぶどう園の主人に雇われて仕事をしたその日、彼らが仕事を開始した時刻には5通り、ありました。朝早くから、9時過ぎから、12時過ぎから、午後3時過ぎから、そしてもう仕事も終わる夕方の5時近くになってから、という5通りです。

② この5通りの差は、時間的長さの観点で、12人の弟子たちで言えば、イエスの弟子になった順番でしょう。信者全般で言えば、信仰をもってから何年、地域教会での牧師や役員の立場になって何年、ということでしょう。また、労苦など払った犠牲という観点からは、どれだけの富や社会的地位を捨ててきたか、家族関係や人間関係を犠牲にしてきたか、福音宣教のためにどれだけ私財を投じ、時間を費やしてきたか、などになるでしょう。

③ こういった差を人間的な目で見れば、それに比例して神からの報償（つぐない・回復）あるいは報奨（報酬・ご褒美）があつて当然だと思われま

3. しかし、このような人間的な目で判断してはならないことを、イエスはたとえ話の結論で教えています。

(1) 信者は、神のぶどう園で働く者ですが、その報酬がいくらになるかは、神にゆだねるべきです。信者は、ひとりひとり、「自分の分」を受け取るのです。

(2) 誰を働き人として選ぶか、そしてその人にいくら報酬を払うか、これは神が決めることです。

(3) 神は、良い方です。正しく、公正で、気前のいいお方です。この理解があつてこそ、信者は心から神を信頼し、神の決定にゆだね、神がくださる自分の分を喜ぶことができます。

4. 16節 最後にイエスは、次のように言われました。「このように、あとの者が先になり、先の者があとになるものです。」

(1) 5通りの労働者たちは、最後に来た者たちから順に賃金が支払われました。人間的

には朝早くから働いた者たちにまず、支払われるべきでしょう。また、支払われた報酬は、働いた時間に比例すると思っていた者たちにとっては不満を感じるものでした。

- (2) 神によって信者に与えられる報償（つぐない）や報奨（ご褒美）は、人の目から見ると順番が逆転するように見えます。しかし、神は良い方です。そして隠れた所で見ておられる神が報いてくださる（マタイ 6：4、6）ことが、本当に正しく、公正なのです。
- (3) どのように不公平に見えることでも神を信頼して人生を歩むことができる信仰者は、なんと幸せなことでしょう。ねたみや不満から解放される人生です。